

朝会の話 「いのち」について考える

5月2日（火）今年度第1回目の朝会でお話をする機会をいただきました。

少し難しいテーマですが、今私が子どもたちに最も伝えたい「いのちの大切さ」について話してみたいと思います。

導入では、自分が誕生して9日目の写真、次に6ヵ月目、そして3歳の時家族で海水浴に行った時と3枚の写真を提示します。3枚目の写真の中に父がでてくるので、少し父との思い出を紹介したいと思います。そして、4枚目に父と最後に撮った家族の集合写真をみてもらいます。実はこのときすでに父は病に犯され一緒にいれる時間は限られていたことを伝えていきます。

展開の前段では「いのち」に「ゴール」があることにふれ、私自身も大切な人の死を身近に感じ、改めて「いのち」が尊いものであることを知ったことを伝え、日野原重明さんの著書「いのちのおはなし」を紹介します。

ここで、子どもたちに「いのちは体のどこにあるか」と問いかけます。

胸、おなか、頭、さあどこでしょう。子どもたちに自分の体の中のどこに「いのち」があるのか静かに手をおいてもらいます。

多くの子どもたちは胸（心臓）に手を置くことが予想されます。そこで、心臓の音つまり鼓動に着目し、「いのち」の音を静かに聴いてみます。村石先生から保健室にあった聴診器を借りるので、それを使って（何とかして）聴いてみます。鼓動を聴くことを通して今こうしているときも「いのち」の音は続いていることに気付かせ、「いのち」が尊いものであることを実感させたいと思います。

展開の後段では、もう1度最初の写真を提示し、私が50年以上も生きてきたように、子どもたちにはこれから長く生きていく時間があることを知らせ、生きることの大切さを改めて知らせたいと思います。最後に日野原先生の「いのちは生きていく時間」であることを紹介しまとめて行く予定です。

「いのち」の尊さは学校だけで教えられものではなく、本来「いのち」を育む場である家族や家庭がベースになっています。先日の仙台市小学校長会の総会で「命と心を守り育む教育の推進」を活動の重点にするという話がありました。難しいテーマではありますが、大人でも子どもでも一つの「いのち」であることには変わりなく、だからこそ朝会のような全校児童・教職員が集う場で考える時間をもつことが大切ではないかと思います。この後は担任の先生方が自分の言葉で「いのちの大切さ」を子どもたちに語ってください。